

AFPY (Adventure Friendship Program in Yamaguchi) の概要

「やまぐちふれあいプログラム」

1 AFPYの定義

AFPYとは「個人や人間関係のよりよい変容をめざして、山口県の指導者が健康な子どもから大人までを対象に、AFPYの指導要領・指導原理に基づき、主に集団に関わる様々な理論や技法を活用して実施する集団活動の総称」と定義される。(藤村寿氏『AFPY入門』による)

このプログラムは、1941年以来世界中に広がった野外教育機関であるアウトワード・バウンド・スクール(OBS)の教育手法・またそこから派生したPAプログラムを元に、山口県における自然体験活動及び野外教育の伝統と実績をふまえて構想された山口県独自の体験学習法である。

その活動目標は「個人や人間関係のよりよい変容」である。一人では困難な課題であっても、集団が協力すれば解決(達成)できるという体験を通して、温かい集団づくりを行う。また、参加者一人ひとりがチャレンジレベルを選んで活動に参加する中で「自分の存在をみとめてくれた」「じぶんも人の役に立てる」「思ったよりやれた」といった自己肯定感を向上させることを目指している。

この教育手法は、課題をグループでチャレンジして解決していくものであるが、実は課題を解決することがねらいではなく、その過程を重視している。指導者は学級の中の間人間関係や集団の関わり方などの状況を見ながら、「今この子どもたちにとって、必要なことは何か」「もっと、こんな集団に高まってほしい」というねらいをもって、子どもたちの年齢や意識レベルなどにも配慮しながら、課題を選択し提示する。子どもたちが課題達成に向けて挑戦と再試行、話し合いを繰り返す中で、互いを尊重とする気持ちや自分たちで解決していこうとする力が育っていく。

指導者は、教え込むのではなく、暗喩を使って、子どもたち自身の気づきを引き出していくようにする。また、その課題を解決しようとする時の子どもたちの動き、言葉のやりとり、仲間との関わり方などを観察し、活動中や活動後の「ふりかえり」の中に生かすことが必要である。「ふりかえり」においては、この活動で子どもたちが気づいてこと、学んだことを単にこの活動の中に留めずに、日常において同じことが起きていないか、この活動を通じて自分はこれから何を大切にしていきたいかなど、日常化・一般化を図っていくことが大切である。

グループの実態に応じて目標を設定し、こうした「課題の提示」「挑戦」「話し合い」「ふりかえり」という学習課程を繰り返していくことでグループ・個人の成長を促すことができる。

AFPYの指導原理である“最大限に相手を尊重すること”“子どもが自分たちで気づける暗喩の活用”“子どもの言動にいかに敏感になり、それを子どもたちに返していくか”ということは、AFPYの活動の中でのみ行われるものではなく、子どもたちの日常の学校生活の中で起こる課題の解決に対しても行われるべきものであり、教育全般にわたって必要な理念である。

AFPYはそういう意味で、学校生活全般の中においてその活動や考え方を生かしていくことができる。AFPYを教育活動の中で実施していく利点として次のようなことが考えられる。

- ・ ゲーム的要素の強い活動過程において、子どもたちは楽しみながらも本音が出る事が多く、人間関係が表面化する。
- ・ 話し合い活動を取り入れることで、課題を解決するための方法を学ぶことができる。
- ・ 子どもたちの目標とグループの状態に合わせて活動を組み立てることができる。